＊＊＊＊＊ 2020年度　講演会報告 ＊＊＊＊＊

1冊の本ができるまで

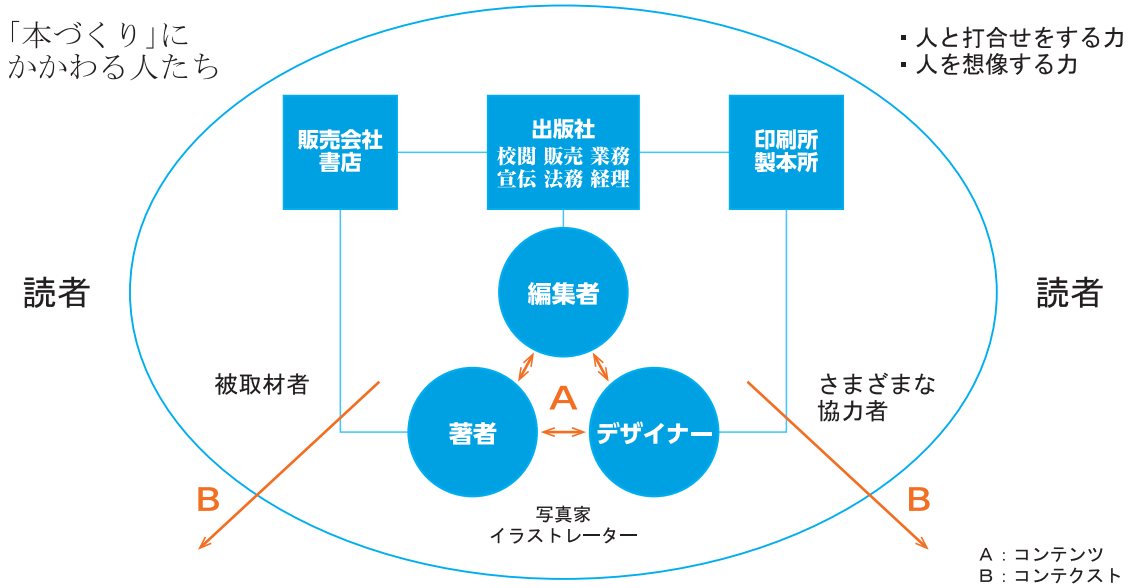
講師：小沢　一郎 氏（フリーランサー・武蔵野美術大学非常勤講師）

昨年の11月25日（水）に、講談社元出版部長の小沢一郎先生をお招きして「1冊の本ができるまで」と題したZoom講演会を開催しました。小沢先生は40年近く、日本で最も大きい出版社の講談社で、数多くのベストセラーを担当した経験の持ち主で、現在武蔵美術大学で編集関係を教えており、本の編集に関してはその名が知られている方です。

講演会では30枚以上のスライドを用いて、1冊の本ができるまでの工程を丁寧にまた丹念に取り上げてくださいました。流れに合わせて長年関わったベストセラー作家の映像や秘蔵の手書きの原稿まで紹介してくださり、2時間にわたる講演会でしたが、画面から目が離せないほど興味深い内容でした。本好きの人にはたまらない、また今まで本をあまり読んでいなかった人にはつい本屋に行ってみたくなるような刺激を与えてくれたと思います。

講演会の冒頭に「本作りについてのお話をする前提として」と題したスライドでは現在出版産業が置かれている厳しい現状にも触れられ、50年以上にわたる出版市場の変遷と変化を知る貴重な時間になりました。1997年が売り上げのピークの年で、1997年に2万2200店もあった書店が2019年には約半減の1万1400店になった苦しい状況にも触れておられました。「ひとり出版社という選択肢」というスライドでは新たな出版の可能性と多様性について示唆を得ました。

図で紹介する「本づくりにかかわる人たち」からわかるように、1冊の本ができ、私たちの手元



に届くまで多くの人による協業が必要であることを思い知らされました。

10人近くの教員に加え、学生たちも参加した中で、本という紙媒体が持つ良さと時代の変遷と今後の課題についての質問がありました。活発な意見交換がなされ、小沢先生は時間を延長してご自分の経験を交えながら丁寧に応対してくださいました。日本の国民的コミックである『ドラえもん』を100年先の未来まで読み継がれる永久保存版にするための様々な工夫の話のところでは感動を覚えた人も少なくなかったでしょう。ベストセラー作家との関係や表紙の決め方、売れ筋の本にまつわるエピソードなど、普段聞くことのできない話も聞けて、本に対する印象や選び方に新たな視点を与えてくれた時間でした。夏目漱石の作品を含め多くの本の表紙や装丁の話を聞いた参加学生から「書物への関心を増してくれた機会でした」とのコメントが寄せられたので、次の企画を考えたくなりました。

（文責：尹亭仁）